

取材先	金子みすゞ・雅輔の会		
企画名	金子みすゞ 没後90年記念事業 ～永遠に響くみすゞの詩～		
備考			
取材日	2020年2月16日(日)天候[雨] [10:30~12:00]	取材地	下関市役所本庁舎新館 エントランス

レポート

「金子みすゞ・雅輔の会」は、童謡詩人金子みすゞと、その弟で劇団「若草」創設、作詞家・作曲家の上山雅輔の二人を顕彰する団体で、姉弟が過ごした下関の文化や歴史、功績を次代に継承するとともに、地域文化の普及やまちづくりの発展に寄与することを目的に活動されています。

今回は、本会主催の、金子みすゞ没後90年記念事業を取材させていただきました。

まず、下関少年少女合唱隊のみなさんが、みすゞの詩を歌のしらべにのせて合唱しました。代表作の一つである「私と小鳥と鈴と」の詩では、手話を交えての合唱でした。本当に感情豊かな、まさしく心に響く歌声でした。

続いて、下関市立名池小学校の児童のみなさんが、みすゞの詩を朗読しました。みなさんは、日頃から、絵画展やみすゞの生まれ故郷である長門市の児童との交流会などを通じて、みすゞの詩に親しんでいるようです。ひとり一人が、朗読する詩を選んだ理由を言いながら、詩を読みました。

そして、最後に『みすゞの処女作』と題した記念講話が、金子みすゞ研究者である木原豊美氏より行われました。みすゞが世の中に出るようになったきっかけの地が下関であること、みすゞが残したとされる512編（講師によると512編+4編+α）の詩の一番最初に書かれた詩が「障子」であることなどが紹介されました。この「障子」という詩は、金子テル（本名）が、これから童謡詩人金子みすゞとして生きていくと宣言したといえる記念すべき詩だそうです。短い時間ではとても話きれないといった様子が伝わってくる、「もっとみすゞのことが知りたい！」と思わせられるお話でした。

講演後、会長の島村さんは、下関の素晴らしさを若い人たちに再確認してもらいたい、また、全国でも、みすゞと雅輔と一緒に顕彰しているのは当会だけだということで、会への参加を呼びかけていました。

「みんなちがって、みんないい。」

あらためて、金子みすゞの奥深さを感じる良い機会となりました。

状況写真



▲会長の島村さん

参加者は約180名でした！



▲講師の木原豊美氏



会場のいたるところにみすゞの詩が展示されていました！